
コールドゲームの後で…

pasuko

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

「コードゲームの後で…」

【著者名】

pasuko

NO867D

【あらすじ】

甲子園を目指した僕たち…しかし、三回戦に第一シードで、春の大会優勝した高校に当った…

プロローグ

また、軽快な金属音が聞こえた。

白いボールは、ライトスタンンドに綺麗に弧を描き、消えた…

僕はボールが消えた彼方をずっと見る。

ホームランを打ったバッターはファールグランドに金属バットを転がし、悠々とダイアモンドを回る…

「…スリーランホームランか…」

僕はロージンバックを地面に投げ捨てた。またホームランを打たれた。

「早く終わらないかな～」

それだけ頭にない…

つらい、もう投げたくない…

ロッカールーム

もう何点入れられたかわからなかつた。

それだけ相手に打たれまくつたからだ。

少なくとも、10点以上はとられていたと思う…

なんせ、その試合は五回コールドが成立したからだ。

「雨宿…」

試合の後、キヤッチャーの石井が僕に声をかける。

試合で負けた僕を気を使つてているのか？ いつものようなラフな話
し方とは違い、丁寧だった。

しかし、僕は石井にろくに返事をせず、スパイクが入つた袋とクラブを乱暴にエナメルバックに入れた。

「大丈夫か？」

それでも、石井は続けた：

けど、僕はこれも返事をせずに、ロッカールームを後にした。

もし石井の問いかけに答えるとしたら、多分、大丈夫じゃないだろう。 三年間一緒にバッテリーとして頑張ってきた石井の問いか

けに返事もせず、一人で苛立っていたからだ。

なんせ、今日の試合は、自分が経験した敗戦の中で、一番強烈だつた。

相手が、なんせ春の甲子園出場校だ。勿論今大会、第一シードだ。

勿論、自分たちがどんなに頑張つても、勝てなさそつた相手だ。

しかし、勝てないと信じ込むのは良くない……僕たちだって、ここまで一試合勝つて来たんだ。なにがあるさ……

そう信じて、試合に臨んだ。

自分自身にそう言い聞かせて、マウンドに上がつた。

けど、奇跡も何もなかつた。

ストライクゾーンの何処に投げても、バッターは悠々とバットを振つてヒットにする。

打たれたボールは内野を抜けたり、外野に転がつたり……バックスクリーンに消えたり……

味方打線のバットは空を切るばっかり……

そして、五回表ツーアウト 僕のバットが空を切つて、試合は終わった。

17-0 五回ホールドだった。順当どおりの試合だった…

皆が着替え終わると、石井はロッカールームの前の廊下に、僕たちを並ばせた。

そして、監督が来た。

「よろしくお願ひします」

石井は大声で言った。 キャプテンの仕事だ。

僕たちも続く…

お決まりの挨拶だ。

「石井… キャプテン」 堀劔様、今までずっとひっぱてました。 その責務をよく果たした。」

石井は涙ながら「ありがとうございます」と大声で返事した。

それから、そんなことをナイン全員に言った。 そして…

「堀劔」 監督は最後に僕を呼んだ。

「はい」 こままでずっと声のを避けていたのか? と思いながら応

えた。

「我がチームのHースとしてよく頑張った…」

「はい」

「結果はどうであれ、皆ベストをつくしたはずだ。 今日は家に帰つて、心身共にゆっくり休め。 以上解散だ。」

結果はどうであれか… 敗戦投手の僕に対することなのかな… そんなことを思った。

頼もしい後輩（前書き）

暫く更新できなくてすみません。

頼もしい後輩

あの試合から一ヶ月が経つた。

八月の半ば……蝉時雨が注ぐグランドに僕はいた。

もう、後輩が秋の大会に向かって、声を張り上げて、頑張つて練習していた。

今日、何故か、石井に呼びつけられたのだ。

けど、呼びつけた当の本人はグランドにはグランドにいない……

「おい 呼びつけて、遅刻かよ」

グランドの脇の木陰に下に座つて、野球部の練習を見た。

軽快な金属音が聞こえる……後輩たちが、打撃練習をしているようだ。

また、「キン」と軽快な金属音が聞こえる。

ナイスバッティング……打たれたボールは高々と上がり、グランドのネットに直撃した。

「頼もしい後輩だな？」

後ろから声が聞こえた。

「悪い……遅刻した」

石井だつた。

「おーおー 呼びつけて遅刻かよ」

「いいだろ…お前、試合負けてから、ずっと顔合わせてくれなかつたしな…」

「ああ… さうだつたのか？」

「さうだ。 引きこもつてしまつたかと思つたよ… 試合で負けてしまつたショックでよ」

「それはないな… で、なんで呼びつけたんだよ？」

「後輩の練習に付き合つのれ？ 勿論、クラブは持つてきたよな？」

「おいおい。 うち等は引退した身だぜ？ キャッチボール程度かと思つたよ。」

「引退したエースの球を打つてみたいと言つからうね 向うが…」

また、軽快な金属音が聞こえた。

「頼もしい後輩だな…」

「ああ…」

僕はクラブを拾い、立ち上がつた。

「本当に頼もしくね」

いつもと違うフリー バッティング

僕と石井はノックカーをしていた一年キャプテンの和久井に近づいた。

「こんにちは」

石井が言う

「こんにちは 石井先輩 雨富先輩…」

和久井が応える。和久井は、石井の後をついで、キャプテンになつた。

すこし強情な所があるけど、眞面目な性格が買われ、皆を引っ張る事になつたのだ。

「今日はなぜ来たか？ 分かるよな？」

「はい…」

和久井はそう言った。

「練習終了 一年、戻つて来い！！」

和久井はグランドに向かつて、叫ぶ。ボールを捕つていた一年生は「はい」と返事し、走つて戻つてきた。

「今日はいつもと違うフリー バッティングをする。三年生のバッテリー 雨富先輩と石井先輩が投げてくださるそうだ。だから、

普段のマシンとは違った実戦的なバッティング練習だ

和久井はそういった。そして、いつかに向って…

「お願いします 雨宮先輩 石井先輩」

「お願いします…」

他の誰もいません。

石井は、軽く礼をして、応えた。

「順番はレギュラーからだ。以上…、練習開始」

和久井はそう言いきった。一年生の数人はグランドに散った。

「おーおー、俺が投げるのかよ?」

僕は、皆が散った後、石井に聞いた。

「当たり前だよ…そもそも投げるのはお前の本職だろ? 俺が投げれると思っているのか?」

石井は笑いながら言った。

「俺が投げたら、マシンだよ… いくら球が速くてもね…」

まあ、石井は強肩だけど、さすがにマウンドで投げるのせじうかと思つた。

「たしかに…」

「まあ、頼むよ。後輩に胸を貸してあげな、元エース。

「わかつたよ、貸してあげるよ」

「んじゃ あ肩慣らしにキャッチボールでもするか?」

「もちろん…元キャプテン」と僕は返事を返した。持つて来たグローブを左手にはめた。

それから、石井と何回か投げた。

一ヶ月もやつてなかつたから、捕るのが下手くそになつたのだろうか?…ボールをミットの真ん中で捕れなかつた。

「ん、じゃあ 座つてもいいか?」

石井は聞いてきた

「いいよ、お願ひ」

僕は応える。

石井はゆっくり、座つた。

「よし 来い ストレート」

ど真ん中!!ヒットを構えて、石井が大声で叫んだ。

「こへよ~」

僕も石井に負けないぐらい、大きな声で言つた。

両手を高々と、空に上げる。

背を伸ばし、左足は高く突き上げる。

突き上げた左足を、思いつ切り踏み出し、胸を開き、折りたたんだ肘を前に持つてくれる。

鞭のよじに、肘を伸ばし、手先からボールの縫い目が抜ける。

ボールは派手な音を立てて、石井のミットに収まる。

「ナイスボール」

よかつた。まだ、感覚が残つていた。

気持ちよく、ボールをリリース出来た。

なんというのか…スーと無駄な力がなく、流れるように投げれた。

あの試合から、始めて投げた一球…最高の出来だった。

いつもと違うフリー バッティング（後書き）

更新スピードが遅くてすみません。
また、
黙文ですがよろしくお願ひし

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0867d/>

コールドゲームの後で...

2010年11月12日21時29分発行